ヘレニズム時代までのギリシアの劇場の舞台と客席との位置関係について ON RELATIONSHIP BETWEEN THE POSITIONS OF STAGE BUILDING AND CAVEA OF GREEK AND HELLENISTIC THEATERS IN ANCIENT GREECE

渡 邊 道 治*

Michiharu WATANABE

This paper discusses about some features in the positions of stage building and *cavea* of twenty-three Greek and Hellenistic theaters constructed in Greece through a geometrical analysis. As a result, the following four points are drawn out; (1) the positions of stage building and *cavea* are related each other by a circle or a regular polygon inscribed in an another circle, (2) of the circle described above are there two patterns, one equals to a orchestra and the other corresponds to a circle of which diameter is taken between the lowest steps of *cavea*, (3) after an introduction of a permanent proscenium, it happened in most theaters that one side of a regular polygon coincides with a position of front of the proscenium, (4) around Athens there are a few theaters with particularities, in which a position of front of a proscenium coincides with one side of a regular polygon inscribed in a circle while keeping a circular orchestra space.

Keywords : theater, greek, hellenistic, geometrical analysis, cavea, proscenium

劇場、ギリシア時代、ヘレニズム時代、幾何学分析、客席、プロスケニオン

1. 研究の目的と方法

劇場建築はギリシア・ローマ時代に数多く建設され、この時代にひとつの建築タイプとして確立された。ギリシアのアルカイック時代から西ローマ帝国滅亡までの期間に地中海世界に確認できる劇場（オデイオンも含む）は900例ほどにおよぶ⁽¹⁾。劇場が観劇を主目的とすることから、その平面計画において客席と舞台建築（本稿では舞台を演者が演じるための部分のみ、つまり一段高くなった部分のみに限定して用い、舞台を含む演劇を演じるための建物全体を舞台建築と称する）の位置関係がきわめて重要なことは当然のことである。そこで本稿の目的は、現存する遺構をもとに、ギリシア時代からヘレニズム時代にかけてのギリシアに残る劇場において、客席と舞台建築との配置に関して円と正方形以外の正多角形を介しても位置関係が存在したことを明らかにすることである。ギリシア演劇がギリシアの地に生まれ発展した中で、それを上演した劇場もギリシアの地で生み出され、その後のギリシア、ヘレニズム、ローマ世界で建設されてきたのであるから、本稿ではまずギリシアに地域を、そしてギリシアとヘレニズム時代に時期を、限定して分析を行った。

分析にあたって遺構の保存状態が良く、精緻な発掘報告がなされている14例と、実測寸法は欠けているものの分析可能な平面図が

報告されている9例、合計23例を対象とした。その際に客席や舞台が改修や改築、あるいは再建されてその平面が大きく変化した場合には異なる劇場として取り上げることとした。これまでの研究によってギリシアにはヘレニズム時代までに95の劇場が建設されていたことが確認できている。その中で客席と舞台建築の両者の位置を示した図面が存在するのが27劇場であった。⁽²⁾しかし、その図面の精度および発掘報告書の内容は様々であり、本稿の分析に使用できる図面精度と発掘調査内容を備えているものは23劇場であった。

分析に際して、現存遺構に最も適合する円と正多角形を想定し、遺構の実測値との相違が最も小さい図形を求めた。なぜなら、ウィトルウィウスはオルケストラの円（あるいは「底の円」）とそれに内接する正方形の一边がスカエナとプロスケニオンの位置に一致すると記述しているからである。本稿では正多角形に関しては、ウィトルウィウスの記述から、最大で正十二角形までとした。⁽³⁾

2. 研究の背景

ギリシアの劇場の平面の割り付けについて記述した唯一の古代の文献史料である建築十書において、ウィトルウィウスはギリシア劇場では基準となる円がスカエナに接し、その円に内接する正方形の一边がロゲイオンの前面に一致しており、ローマ劇場では基準となる

* 九州東海大学工学部建築学科 教授・博士(工学)

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu Tokai University, Dr. Eng.

円に内接する正三角形の一边がスカエナの前面に一致し、その一边に平行に円の中心を通る直線の位置にプロスケニオン (=プロスカエニウム、ロゲイオン) が置かれると述べている。すなわち、基準となる円とそれに内接する正三角形もしくは正方形を用いてギリシアとローマの劇場の客席と舞台との平面上の位置関係が定められると指摘している。(図1)⁽⁴⁾

このウィトルウィウスの記述の手がかりとし、現存するギリシア型劇場(客席平面が半円を超えた扇形をなし、かつ舞台建築と客席が個別に立つタイプの劇場)の平面における客席と舞台建築との平面上の位置関係に関する研究が行われてきた。まずドゥルプフェルドが、ギリシアの劇場ではオルケストラの円がスカエナに接する、あるいはプロスケニオンに接することを基本に計画されていると指摘した。⁽⁵⁾ 次いでプフシュタインがウィトルウィウスのギリシア劇場に関する記述はヘレニズム時代の劇場の舞台に一致すると主張した。その後フィーヒターによってより多くの事例を対象とした包括的な研究がなされ、オルケストラの円がスカエナに接する場合と、その円に内接する正方形の一边がプロスケニオンの位置に一致する場合の2通りがあることが新たに明らかになった。⁽⁶⁾ フィーヒターの考えは、ビーバーやシアなどのその後の研究者に継承されてきた。⁽⁷⁾

こうした研究を包括するような形でディンズモアは劇場建築の建築的な発展と関連づけて以下の諸点を指摘している。⁽⁸⁾ (a) プロスケニオン出現以前ではオルケストラは円形平面をなし、その円に接する位置にスカエナが置かれるか、あるいはその円よりも外側に置かれた。(b) 石造の恒久的なプロスケニオンが建設されるようになるとプロスケニオンはオルケストラの円を横断する位置に置かれるようになった。またプロスケニオンが当初から建設された劇場のなかにはオルケストラの円がスカエナに接する例が若干見られる。(c) モニュメンタルな劇場では基準となる円の中心にスカエナがより近付き、そのオルケストラの円がスカエナに接する例が見られる。(d) アテネのように古典演劇の伝統が根強い地域ではプロスケニオンが建設されても、それがオルケストラの円の内側に位置するようなことはない。(e) プリエネの劇場のみで基準となる円がスカエナに接し、その円に内接する正方形の一边がプロスケニオンの位置に一致する、つまりウィトルウィウスの述べるギリシア型劇場の配置の方法に完全に一致する。

これらの既往研究はウィトルウィウスのギリシア型劇場平面に関する記述に合致する遺構を求めることで、その信憑性を確認することにその主眼を置いてきたといっても過言ではない。すなわち、基準となる円(ほとんどはオルケストラの円であるが)がスカエナに接する場合と、その円がスカエナに接し、かつその円に内接する正方形に一边にプロスケニオンが一致する場合があり、後者の例はヘレニズム時代の東方タイプの劇場(小アジアの劇場)、たとえばプリエネやエフェソスなどのごく少数の劇場に見られた。そしてウィトルウィウスの記述の妥当性を証明することを求めてきた研究の結果として、ウィトルウィウスの記述に合致する場合と一致しない場合に分けられ、前者はギリシア型劇場平面の代表例のごとく扱われ、後者はその他多数のものとして放置され、舞台と客席の位置関係の観点からの研究がなされてこなかったのが現状である。わずかにフォンゲルカンらがエピダウロスの劇場の分析において基準となる円に内接する正五角形がプロスケニオンの位置に一致すること明らか

にし、正方形以外にも基準となる円に内接する正多角形が意味をもつことを指摘している。⁽⁹⁾

3. 基準となる円の設定について

劇場の客席と舞台建築の位置関係を分析する上で基準となる円を、既往の研究では実は確たる根拠もなくオルケストラの円に定めている場合が多く、それ以外の円が設定される場合でも統一された原則があるわけではない。⁽¹⁰⁾ 基準となる円の設定方法が確定しない原因はウィトルウィウスの記述の曖昧さに起因している。彼は第5書、第7章、第1節のギリシア劇場の平面割り付けの手続きの説明の中で、基準となる円を「底の円」*ima circinatione* と表現している。ローマ劇場の説明でも同じように「底面の周」*perimetros imi* という表現を用いている。つまりオルケストラとは一言も述べていないのである。一方で、同じ書の第6章、第5節のローマ劇場の説明では「オルケストラは一番下の階段席間と同じ直径をもつ」と述べている。つまりウィトルウィウスはオルケストラの円は客席最下段の円と同一であることを前提として劇場平面の割り付けを行っているとは解釈できる。

しかしながら、実際の遺構は必ずしもそうではなく、両者が異なる直径の円をなすことがしばしば見受けられる。なぜならオルケストラと客席の間にエウリポス *euripos* と称される通路兼排水路部分が挟まれる場合が見受けられたり、あるいはオルケストラ周りに背もたれと肘掛けの付いた貴賓席が設置され、その背後に通路を挟んで客席が取り囲む場合もある。(図2) 彼が生きていた時代に両者が一致しない例が実在していたことから、そうした劇場を知らなかったとは推測しにくい。あるいはそうした劇場の存在を充分承知した上で、基本的な理論を述べるために簡略化した平面を想定して述べたか、あるいは「底の円」というきわめて曖昧な表現を意図的に用いることで基準となる円がどのようにも設定できることを想定していたとも考えられる。このことから、本稿ではオルケストラの円と客席最下段の円が同一でない場合には、その両方が基準の円となる可能性があると思なし、その円とそれに内接する正多角形の中で現存遺構に最も一致する幾何学図形を求めた。なお本稿では、2つの円が一致しない場合、すなわちオルケストラ周りに貴賓席やエウリポスが置かれる場合には、客席両端部の支持壁の内側端部が終わる地点に繋がる円弧で、かつその貴賓席の内側、あるいはエウリポスの外側の円弧に従う円を客席最下段の円と以下では表記する(図2)。

4. 分析結果

ヘレニズム時代末までにギリシアで建設された劇場の中で、客席と舞台建築との位置関係が明瞭な23例についての分析結果を表1にまとめた。表1には、左欄から右に、劇場の位置する都市名、分析対象の劇場名、最初の建設年代、客席や舞台建築各部の建設年代、エウリポスの有無、客席と舞台建築を結び付ける幾何学図形の種類、その幾何学図形の一致する場所、幾何学図形の基準となる円の種類、基準となる円の半径、基準となる円の中心から幾何学図形が一致する場所までの実測距離、基準となる円の中心から幾何学図形が一致する場所までの理論上の距離、前者2つの誤差(すなわち理論値と実測距離との差)が記されている。各部の寸法の取り方は図2に示し、各劇場における実測値と図面はそれぞれの発掘報告書より収集した。⁽¹¹⁾ 実測寸法が不明であるが、図面が入手できた5例(基準となる円の半径や誤差が未記入の劇場)については図面上のみで適合

表1 ギリシアからヘレニズム時代のギリシア劇場における客席と舞台建築との位置関係

	分析対象の劇場名称もしくは区別	最初の建設年代	分析対象劇場の客席とオルケストラの建設年代	分析対象劇場のスカエナの建設年代	分析対象劇場のプロスケニオンの建設年代	分析対象劇場のバラスケニオンの建設年代	エウリポスの有無	客席と舞台建築の位置を結ぶ幾何学図形	幾何学図形が一致する舞台建築の部分	幾何学図形の基準となる円の種類	幾何学図形の基準となる円の半径 (R)	基準円の中心から幾何学図形の一致する場所までの実測値 (L) (単位 m)	基準円の中心から幾何学図形の一致する場所までの図形上の理論値 (D) (単位 m)	誤差 (L-D) (単位 cm)
ソリコス		前500年頃	同左	-	-	-	無	なし						
メガロポリス	第1期の劇場	前350-前329年	同左	同左	-	-	有	なし						
アテネ	ディオニソス劇場 (リュクルゴス時代)	前6世紀	前338年-前326年	同左	同左	同左	有	円	バラ	オル	9.81	9.87	9.81	6
ポセイディオン	第2期の劇場	前5世紀末から前4世紀初め	前4世紀末	前3世紀初め	-	前3世紀初め	有	正六角形	プロ	オル	6.9	5.96	$R \times \cos 30^\circ = 5.975$	-1.5
エレクトリア	第2期と3期の劇場	紀元前4世紀中頃	紀元前3世紀初め	前4世紀中頃	第2期は前3世紀初め (第3期は前2世紀か前198年以降)	同左	有	正八角形	プロ	客	11.02	10.32	$R \times \cos(45^\circ/2) = 10.18$	14
カソッペ	劇場	前3世紀初め、あるいは若干後	同左	同左	同左	同左	無	正五角形	プロ	オル	9			図上
ドローナ	第1期の劇場	前297-前272年	同左	同左	同左	同左	有	なし						図上
エギラ	第1期の劇場	前280年-前250年	同左	同左	同左	同左	有	正六角形	プロ	客	9.95	8.58	$R \times \cos 30^\circ = 8.617$	-3.7
コリントス	第2期の劇場	前415年	前338年から前250年	同左	-	同左	有	正六角形	スカ	客	11.7	10.05	$R \times \cos 30^\circ = 10.032$	1.8
マンティネア		前4世紀	前222年以降のヘレニズム時代	同左	同左	同左	有	正五角形	プロ	オル	10.04	8.16	$R \times \cos 36^\circ = 8.12$	4
ドローナ	第2期の劇場	不明	前297-前272年	前3世紀末 (前219年以降)	同左	同左	有	正六角形	プロ	客	報告書記載なし			図上
カソッペ	小劇場 (第2期)	前3世紀	前3世紀末	同左	同左	同左	無	円	スカ	オル	8.15			図上
ネア・プレウロン		前3世紀	同左	同左	同左	同左	無	正三角形	プロ	オル	5.8	2.99	$R \times \cos 60^\circ = 2.9$	9
デロス		前4世紀末から紀元前246年	前246年	同左	-	前180年	無	円	スカ	オル	10.5	10.6	10.5	10
デルフィ		前3世紀末から前160年頃	同左	同左	同左	同左	有	正五角形	プロ	オル	9.25			図上
アテネ	ディオニソス劇場 (ヘレニズム時代)	前6世紀	前338年-前326年	紀元前2世紀中頃より若干前	同左	同左	有	正六角形	プロ	客	13.55	11.71	$R \times \cos 30^\circ = 11.734$	-2.4
エピダウロス		前300年頃	前300年頃	前2世紀中頃	同左	同左	有	正六角形	プロ	客	12.39	10.81	$R \times \cos 30^\circ = 10.73$	8
シキオン		紀元前3世紀前半	同左	紀元前2世紀中頃	同左	同左	有	正五角形	プロ	客	11.62	9.4	$R \times \cos 36^\circ = 9.40$	0
メガロポリス	第2期の劇場	前350-前330年	同左	前3世紀前半	-	前2世紀中頃	有	正五角形	プロ	客	17.28	13.97	$R \times \cos 36^\circ = 13.980$	-1
オロポス	第2期の劇場	前4世紀	前3世紀	前3世紀	-	前150年頃	無	正六角形	プロ	オル	6.18	5.55	$R \times \cos 30^\circ = 5.352$	19.8
ペライエウス		前150年頃	同左	同左	同左	同左	有	正八角形	プロ	客	11.7	10.83 (8.2)	$R \times \cos(45^\circ/2) = 10.783$	4.7
オエニアダエ		前3世紀	同左	同左	同左	紀元前2世紀末の可能性あり	無	正方形	プロ	客	11.25	7.84	$R \times \cos 45^\circ = 7.955$	-11.5
メッセネ	オデイオン	ヘレニズム時代 (帝政初期の可能性あり)	同左	同左	?	同左	無	円	スカ	オル	9.7			図上

前は紀元前を意味する。

図上は図面上のみで客席と舞台建築との関係を分析したことを意味する。

オルケストラの円の部分の存在: ○はオルケストラの円の部分が確保されている、×はオルケストラの円が舞台建築で遮られていることを意味する。

プロ: プロスケニオン、バラ: バラスケニオン、スカ: スカエナ、オル: オルケストラの円、客: 客席最下段間の距離を直径とする円、-: 該当する建物なし。

図1 ウィトルウィウスによる
ギリシア劇場の割り付け方法

図2 エピダウロスの劇場の中央部平面図と
表1のための劇場各部の寸法の取り方を示す図

する幾何学図形を求めた。その際の図面縮尺は1/200から1/400の間にあり、本稿の場合その誤差は最大50cmほどになる可能性もある。⁽¹²⁾したがって、この5つの劇場(図3)の客席と舞台建築の位置の間には表1に見られるような関係が存在する可能性が高いと解釈すべきであろう。

4-1. 基準となる円の種類

ギリシアにおける演劇はアルカイック期にまで遡るが、遺構が確認できる最初期の劇場は紀元前6世紀のソリコスThoricusにおいてである。紀元前6-5世紀頃の劇場のオルケストラ平面の形は確定しておらず、円形、四角形状あるいは台形状が提案され、傾斜地の一方か、もしくはオルケストラを取り囲むように客席が造られていた。この頃の劇場では、舞台建築が確実に造られていたと確定できるものではなく、まったく造られていなかったか、あるいは木造の仮設のものが建てられていた可能性が指摘できるのみである。したがって、円形のオルケストラを囲むように扇形あるいは馬蹄形平面の客席が巡り、反対側に舞台が建てられた形式を遺構として最初に確認できるのはリュクルゴス時代(紀元前338年から紀元前326年)のアテネのディオニソス劇場まで待たなければならない。(図4)この劇場において初めて円形平面のオルケストラ、舞台建築、客席の三つが揃った劇場が確認できるのである。⁽¹³⁾

上記の三つが揃った劇場において、オルケストラの必ずしもすぐ外側に客席が円弧状に並んでいるわけではなかった。表1にみられるように、ヘレニズム時代までにギリシアで建設された劇場でオルケストラと客席最下段の円が一致する場合は7例、両者の円の大きさが異なる場合は15例、オルケストラの平面が確定できないものが1例であった。また、前述したように、ウィトルウィウスは基準となる円の記述においてきわめて曖昧な表現をしている。以上の2点から本稿では基準となる円をオルケストラの円と客席最下段の円弧に沿う円の2通りが可能であり、その2つの場合で客席と舞台建築の位置関係の分析を行った。

まず基準となる円について見ると(表1)、オルケストラの平面が不明であったり、あるいはオルケストラもしくは客席最下段間の距離を直径とした円よりも外側に舞台建築が配置されている場合の3例(ソリコス、メガロポリスMegalopolisとドドーナDodonaの第1期の劇場)を除く20劇場の中で、ネア・プレウロンNea Pleuronの劇場など9例はオルケストラの円を基準とし、エレトリアEretriaの劇場など11例は客席最下段の円を基準としていることが明らかとなった。また、オルケストラと客席最下段の円弧がなす円の直径が一致しない劇場15例では、どちらの円も客席と舞台建築との位置関係を定める幾何学図形の基準の円になりうる可能性を持っている。なぜなら15例の中で10例は客席最下段間の距離を直径とする円が基準となっているのに対し、3例はオルケストラの円が基準となっているからである。しかも、全体の事例数はそれほど多くないものの、表1に見られるように紀元前3世紀以降の直径の異なる2つの円が存在する劇場では客席最下段間の円弧に従う円が基準になる場合に限定されている。

これらのことから以下の3点が指摘できる。まず、分析したほとんどの劇場がオルケストラもしくは客席最下段の円を基準とし、その円あるいはその円に内接する正多角形の一边が舞台建築の一部に一致している。つまり、舞台建築と客席部分相互の位置関係を幾何

学図形で結び付ける場合に、基準となる円がオルケストラの円となる場合と客席最下段の円となる場合の2通りあり得ることが実証され、それは紀元前4世紀末あるいは紀元前3世紀初めからギリシアの地に併存していた。次に、オルケストラの円と客席最下段の円弧に従う円の直径が異なる場合には、紀元前3世紀以降の劇場のほぼすべてが後者の円が基準となってその円に内接する正多角形によって客席と舞台建築の位置が関係づけられている。

4-2. プロスケニオンの位置のもつ意味

オルケストラ、舞台建築、客席の3つを備えた劇場建築で次に起こった大きな変化は舞台建築における変化で、とりわけパラスケニオンとプロスケニオンの出現である。パラスケニオンは本来スカエナの側面の建物を意味する言葉で、演劇においてより多くの出入り口を必要としたことから舞台に付け加えられるようになったと解釈される。そのパラスケニオンの最古の遺構はリュクルゴス時代再建のディオニソス劇場であり、その後エレトリアやエピダウロス、およびティンダリスやセジェスタなどギリシアや南イタリアおよびシチリアのギリシア植民都市の紀元前3世紀以降の劇場で造られていった。しかしながら、一般的傾向としてヘレニズム時代以降の劇場では建設されることは次第に少なくなっていく。⁽¹⁴⁾

一方、プロスケニオンはその定義の曖昧さも手伝って、その出現の時期があまり明確ではない。プロスケニオンは言葉の意味としてはスカエナの前に造られた部分を指すのであるが、その部分全体を指す場合もあれば、その部分の前面のみを指す場合もある。⁽¹⁵⁾また、プロスケニオンを造ることで生まれた屋根面が屋根ではなく、上演者が演じる高い台となった時にはその台の上面部分をロゲイオンと称している。しかしながら、プロスケニオンが造られた場合に常にロゲイオンが存在していたと確定できる、すなわち、高くなった部分に上演のための舞台が設置されていたと断言できるわけではない。さらにプロスケニオンの高さの程度によってロゲイオンの存在を決定できるわけでもない。⁽¹⁶⁾

現存する遺構からみると、紀元前3世紀初めにエレトリアで、紀元前280-250年にエギラAegiraで石造のプロスケニオンが造られている。また、タソスThasosの大理石製プロスケニオンの建設時期は紀元前3世紀初めと見なされている。ポセイデイオンPoseideion(現代名Isthmia)の劇場が紀元前4世紀末から紀元前3世紀初めに再建された際に、舞台両側に造られた斜路が確認されており、その斜路はプロスケニオンに上るためのものであると指摘されている。これに対して、南イタリアやシチリアのギリシア植民都市に残る劇場は、紀元前4世紀末から紀元前3世紀初めの時期にプロスケニオンを備えていたのではないかと指摘されている。たとえばロークリでは木製の柱用の柱穴を備えた石材が並び、これらが舞台を支持していたのではないかと見られており、その建設年代が紀元前4世紀中頃と想定されている。またモルガンティーナの劇場ではロゲイオンを支持していた4本の円柱が確認されており、紀元前4世紀末から紀元前3世紀初めに建設されたと見られている。⁽¹⁷⁾

紀元前250年作成と見られるデロス島の劇場建設工事費支払いに関する碑文の中で、紀元前280年の支払い部分にプロスケニオン工事に関する記述が確認されている。また、高くなった舞台、すなわちロゲイオンを舞台建築に必要とした背景に紀元前4世紀末から紀元前3世紀初め頃より流行した新喜劇の存在があげられる。演劇

図3 図面上で舞台建築と客席の位置関係を分析した事例
(上段左と右: カソッペの小劇場と劇場、左下段:
デルフィ、右中段: ドドーナ(第2期)、右下段: メッセネ、)

図4 ディオニソス劇場中央部の平面図

の主流がコーラスや舞踊を中心とした従来の悲劇やサテュロス劇から、台詞を主とした役者による演劇へと変化したのである。それは役者の言葉をより聞き取り易く、かつ役者の所作を見やすくすることを必要とし、その結果として役者を高くなった舞台の上に置くことを求めることとなった。これらの点から考慮して、ロゲイオンを伴ったプロスキニオンは遅くとも紀元前4世紀末から紀元前3世紀初めには出現していたと見て間違いのないであろう。⁽¹⁸⁾

客席と舞台建築の位置に幾何学図形によるなんらかの関係が見られる20例についてみると(表1)、15例がプロスキニオンの位置に、4例がスカエナの位置に、1例がパラスケニオンの位置にその幾何学図形が一致している。すなわち、客席と舞台建築の位置関係を幾何学図形によって結び付ける場合に、そのほとんどの劇場でプロスキニオンが決定的役割を果たしているのである。

パラスケニオンの位置が幾何学図形で舞台建築と客席の位置関係を関係づける上で意味を持つのはアテネのリュクルゴス時代のデ

イオニソス劇場である(表1)。この劇場では、オルケストラの半径は9.81mで、その中心からパラスケニオンまでの距離は9.87mであり、ほとんど等しい。つまり、オルケストラの円に接するようにしてパラスケニオンが置かれている。それに対して、ウィトルウィウスが述べているように、オルケストラの円に接する位置にスカエナが置かれているのは紀元前246年に造られたデロスの劇場と⁽¹⁹⁾、カソッペCassopeに紀元前3世紀に建設され、同世紀末に再建された小劇場、通称ブーレウテリオンのみに確認できる(表1と図3左上)。

一方、紀元前4世紀末に石造で再建されたポセイデイオンの劇場では、オルケストラの円に内接する正六角形の一边の位置にプロスキニオンが一致している(表1)。また、紀元前3世紀初めに客席が再建され、従来のスカエナにプロスキニオンが新たに付け加えられたエレクトリアの劇場では客席最下段の円に内接する正八角形の一边がプロスキニオンに一致している(表1)。したがって、プロスキニオンが出現したと考えられている紀元前4世紀末もしくは紀元前3世紀初めの劇場において、すでにプロスキニオンの位置が客席と舞台建築の位置関係を定める上で最も重要な役割を果たしていたことになる。このことは、プロスキニオンが出現したとして現存遺構から確認できる最初期の時期、すなわち恒久的なプロスキニオンが劇場建築に用いられ始めた当初から、プロスキニオンが客席と舞台建築の位置を幾何学図形で関係づける役割を担っていたことを意味している。

4-3. 客席と舞台建築の位置を関係づける幾何学図形

客席と舞台建築相互の位置関係を決定づける幾何学図形は種々雑多というわけではなく、円(4例)と正多角形(16例)に限定されていることが表1から読み取れる。つまり、客席と舞台建築の位置を関係づける幾何学図形としては円よりも、正多角形が圧倒的に多く一致することが明らかとなった。円が客席と舞台建築の位置を関係づける場合はすべて、アテネのリュクルゴス時代のディオニソス劇場(紀元前338年から紀元前326年)などオルケストラの円で、その円はパラスケニオンやスカエナの壁の位置に一致し、紀元前3世紀以前に建設されたものである。

次に客席と舞台建築の位置を関係づける幾何学図形が正多角形をなす場合の16例の中で(表1)、正三角形や正方形が意味を持つ場合はそれぞれネア・プレウロンの劇場(紀元前3世紀)とオエニアダエOeniadae(紀元前3世紀あるいは紀元前2世紀末)の劇場⁽²⁰⁾のみで、正五角形の場合はカソッペ(紀元前3世紀初め)、メガロポリス(第2期、紀元前2世紀中頃)、マンティネア Mantinea(第2期、紀元前222年以降のヘレニズム時代)、デルフィ(紀元前3世紀末から紀元前160年頃)、シキヨンの劇場 Sikyon(紀元前2世紀中頃)の5例であった。正六角形の一边が舞台建築のスカエナもしくはプロスキニオンの位置に一致する場合はポセイデイオン(第2期、紀元前3世紀初め)、エギラ(紀元前280-紀元前250年)、コリントス(紀元前338年から紀元前250年)、ドドナ(第2期、紀元前3世紀末)、アテネのディオニソス劇場(ヘレニズム期、紀元前2世紀中頃より若干前)、エビダウロス(紀元前2世紀中頃)、オロボス Oropos(紀元前150年頃)の7例であり、正八角形が意味を持つ場合はエレクトリア(第2期、紀元前3世紀初め)とペイラエウス(紀元前150年頃)の2例であった。このことからオルケストラあるいは客席最下段の円弧に沿った円に内接する正多角形の中でも、従来

の研究者が指摘してきたような正方形は少なく、とりわけ正五角形と正六角形のような正方形以外の正多角形の一边が舞台建築のスカエナもしくはプロスケニオンの位置に一致する場合がきわめて多いことが明らかとなった。

このように正多角形を介して客席と舞台建築の位置を関係づける場合、その一边が一致する場所は16例中で15例がプロスケニオンの場所においてであり、ヘレニズム時代のコリントスの劇場でスカエナの位置に一致する1例のみが例外として確認された。さらに、その正多角形の種類は紀元前3世紀の段階では正五角形と正六角形がほとんどであり、それ以外では正三角形による関係づけがネア・プレウロンでみられるのみである。紀元前2世紀以降になって正方形や正八角形による関係づけが確認できる。また、これらの正多角形の種類を地域的にみても、特定の地域に特定の正多角形が集中する傾向はまったくみられない。

前述したように、客席と舞台建築の位置を関係づける幾何学図形の基準となる円にはオルケストラの円と客席最下段の円の2通りが併存していた。そこでオルケストラの円と客席最下段の円のどちらの円に内接する正多角形が客席と舞台建築の位置関係に意味を持つかを見てみると、5例の劇場がオルケストラの円に、11例の劇場が客席最下段の円に内接する正多角形に意味があった。また、オルケストラの円に、あるいは客席最下段の円に内接する正多角形の種類を概観してみると、オルケストラの円の場合では正三角形が1例、正五角形と正六角形が2例ずつであった。一方、客席最下段の円の場合では正方形が1例、正五角形が3例、正六角形が5例、正八角形が2例であった。したがって、基準となる円がオルケストラであろうと、客席最下段の円であろうとその区別に対して客席と舞台建築の位置を関係づける正多角形の種類が特別の関係持つとはいえない。

4.4 オルケストラの円と客席最下段の円の中心がずれる劇場について

アテネのリュクルゴス時代およびヘレニズム時代のディオニソス劇場(図4)、コリントスのヘレニズム時代の劇場、オエニアダエとペイライエウスの劇場の5つでは、オルケストラの円の中心は客席最下段の円の中心よりもそれぞれ1.21m(ディオニソス劇場の二つの時期で二つの円の中心のずれは同じ)、1.495m、0.60m、0.70m客席側にずれている。⁽²¹⁾その結果、客席とオルケストラの間の幅は客席の両端部で最も広く、その中間点で最も狭くなっている。さらにオルケストラの円は舞台建築に遮られることなく確保されている。意図的に2つの円の中心を離して計画されたこの特異な平面は、現在までに上記の5つの劇場のみで確認されている。その平面の出現の背景として、劇場建築の時代的な変化と上演形式に対する地域的なこだわりが指摘されてきた。すなわち、舞台と客席を近づけるような劇場の作り方が一般化する一方で(つまりオルケストラの円は舞台建築で切断される)、アテネ近郊の都市ではオルケストラ全体を使うコーラスと踊りを主とする古典劇の伝統がきわめて強く保たれていた(つまりオルケストラの円部分は残されねばならない)。⁽²²⁾

オルケストラの円をなす部分を確実に確保し、その内側に舞台建築を配置しない方法は古い時代の劇場においてより重視されていたと見て間違いない。なぜなら、本稿で分析対象として取り上げた23例の中12例ではオルケストラの円部分が確保されている。その中で

2つの円の中心がずれる5例を除く7例は、エピダウロスの劇場を除き、すべて紀元前3世紀前半までに建設された劇場である。その典型的な例としてメガロポリス(紀元前350-330年)やドドーナの第1期の劇場(紀元前297-272年)があげられ、これらの劇場では客席と舞台建築の位置関係に関して特定の幾何学的な関係はみられず、むしろオルケストラの円の外側に舞台建築を配置することのみが目指されているように見受けられる。

客席最下段とオルケストラの円の中心がずれる特異な平面形式の最古の例であるアテネのリュクルゴス時代のディオニソス劇場では、客席最下段の円より若干外側にスカエナの壁が置かれる一方(プロスケニオンは持っていない)、オルケストラの円に接する位置にパラスケニオン前面が置かれている。ここに、客席最下段の円やオルケストラの円よりも常に外側に舞台建築を配置しておきたいという意図が読み取れる。しかし紀元前3世紀以降になると、2つの円の中心がずれる劇場でも客席と舞台建築の配置には幾何学図形を介した関係をはっきりと見いだせる。まず紀元前338-250年の時期に再建されたコリントスの劇場ではオルケストラの円のわずかに外側にプロスケニオンが置かれている一方で、客席最下段の円に内接する正六角形の一边がスカエナの位置に一致することが明らかになった(表1)。⁽²³⁾紀元前3世紀建設とされるオエニアダエの劇場では客席最下段の円に内接する正方形の一边がプロスケニオンの位置に一致することが今回の分析で明らかになり、それと同時にオルケストラの円をなす緑石の外側がパラスケニオンの位置にほぼ一致している。⁽²⁴⁾

次に、紀元前2世紀の中頃に改築されたアテネのディオニソス劇場の改築されたパラスケニオンは従来のものより後退し、プロスケニオンが新たに造られ、客席部分とオルケストラ部分には大きな変更は受けなかった。その際に、オルケストラの円は舞台建築に遮られずに、客席最下段の円に内接する正六角形の一边にプロスケニオンの位置が一致することが新たに判明した(表1)。また、ペイライエウスの劇場はディオニソス劇場よりも若干遅く建設されたとみられるが、オルケストラの円の外側に舞台建築そのものが位置しながら、ここでも客席最下段の円に内接する正八角形の一边がプロスケニオンに一致することが分析より明らかとなった(表1)。この劇場の特筆すべき点は、そうした結果を得ながらも、オルケストラの円と客席最下段の円の中心のずれはきわめて小さくなっていることである。

以上のことから、客席とオルケストラの円の中心がずれる平面は単にオルケストラの円を確保しつつも、客席と舞台をできるだけ近づけた結果として生まれたものでないことが明らかである。むしろ客席と舞台の位置を幾何学図形によって関係づけた上で、オルケストラの円が確保できるようにその位置を客席側に寄せるという特殊な手法として生み出されたものとみなすべきである。

前述したように、客席と舞台建築の位置を幾何学図形で関係づける手法は紀元前4世紀末からの多くの劇場で行われていた。特に、紀元前4世紀末あるいは紀元前3世紀初め以降にプロスケニオンが石造化すると、プロスケニオンの位置に基準となる円に内接する正多角形の一边を一致させる場合がきわめて多くみられるようになった。その結果、オルケストラの円はプロスケニオンによって遮られることとなり、オルケストラそのものを円形平面として確保することはできなくなっていた。仮に客席最下段の円に内接する正多角形

の一辺にプロスケニオンの位置が一致し、同心円のオルケストラの円も確保するならば、オルケストラの円の周りに必要以上の幅の通路ができ、客席が舞台から遠く離れてしまうか、あるいはオルケストラの円が小さくなり過ぎてしまう。それを避ける方法は客席最下段の円の中心からオルケストラの円の中心を客席側に移動させることである。

5. まとめ

ギリシアにヘレニズム時代までに建設された劇場の中でその遺構の状態が明瞭な 23 例を対象として客席と舞台建築の位置関係についての分析を行った結果、以下の諸点が明らかとなった。

- ・ 既往研究では、客席と舞台建築部分相互の位置関係を基準となる円もしくはその円に内接する正方形によって関係づけてきた。しかし、本研究によって両者を関係づける図形として正三角形、正五角形、正八角形が考えられることが複数の遺構で確認できた。
- ・ 両者を結びつける基準となる円はオルケストラの場合と客席最下段が描く円の場合の 2 通りが併存していた。
- ・ 現存遺構から見る限り、劇場に恒久的なプロスケニオンが出現した時期以降（紀元前 4 世紀末から紀元前 3 世紀初めの間）、基準となる円に内接する正多角形の一辺はプロスケニオンの位置に一致することがきわめて多くなった。
- ・ アテネ周辺のきわめて限られた地域の少数の劇場において、プロスケニオンの位置が客席最下段が描く円に内接する正多角形の一辺に一致しながら、一方ではオルケストラの円も確保する特殊な位置関係が客席と舞台建築との間に見られる。

注

- 注1) 拙稿、「ギリシア・ローマ時代の劇場建築について」、日本建築学会九州支部研究報告集、第 39 号、2000 年 3 月、pp. 529-532。
- 注2) 表 1 に取り上げられた 23 の劇場以外に、ディウム Dium（紀元前 200 年頃）とタソス Thasos（紀元前 3 世紀第 1 四半期）の 2 つの劇場があげられる。ただし、これらの劇場では客席と舞台の配置についての詳細な報告はまだ行われておらず、また作製された図面もやや精度の落ちる。
- 注3) Vitruvius., *De architectura*, V, 6, 1-3（ローマ劇場）、V, 7, 1（ギリシア劇場）。円とそれに内接する 4 つの正三角形の組み合わせによって客席と舞台建築各部の位置を関係づけている。理論上はどのような正多角形も可能であるが、ウィトルウィウスの述べるギリシア劇場とローマ劇場ではいずれも正三角形、正方形のみを用い、彼の建築書の中で正十二角形の以上正多角形で円を細かく分割する事例は見られないことも考慮した。
- 注4) Vitruvius, *op. cit.*, V, 6, 1, V, 7, 1。
- 注5) Dörpfelds, W., *Das griechische Theater Vitruvs*, in *A.M.*, vol. 22, pp. 439-1897, vol. 23, pp. 326, 1898。
- 注6) プフシュタインは Priene, Termessos, Delos, Assos, Magnesia am Maeander, Ephesos, Pergamon の劇場を対象に分析を行っている（Puchstein, O., *Die griechische Bühne*, Berlin, pp. 46-70, 1901.）。フィーヒターはドゥルプフェルドの分析結果および自身の分析結果を資料とし Priene, Ephesos, Delos, Magnesia, Termessos, Sagalassos, Patara, Tralles, Magnesia am Maeander のヘレニズム期の劇場を分析対象としている。Priene、Ephesos、Delos はオルケストラの円がスカエナに接し、Magnesia am Maeander、Termessos、Patara の劇場ではオルケストラの円に内接する正方形の一辺がヘレニズム時代のプロスケニオンに一致し、Tralles の劇場ではオルケストラの円もしくはその円に内接する正方形の一辺は舞台の位置に一致していない（Fiechter, E. R., *Die Baugeschichtliche Entwicklung des antiken Theaters*, München, pp. 59-66, 1914.）。またオロポス、オエニアダエ、ネア・プレウロン、シキヨン、メガロポリス、エレクトリア、ペイラエウスの各劇場、アテネ

のディオニソス劇場を対象に、客席と舞台建築の位置関係を結びつける幾何学図形として円、その円に内接する正方形もしくは縦横比 1:2 の長方形を取り上げている。しかし、基準となる円の設定の仕方は事例ごとに異なり、さらに前述の縦横比 1:2 の長方形にどのような意味があるのか不明である。（idem., *Antiken griechische Theater- banten*, Heft. 1-9, Stuttgart, 1930-1950.）

- 注7) ビーバーはフィーヒターの説をそのまま受け継ぎ、Priene や Delos の劇場を例として、ローマ支配下に入った後期ヘレニズム時代の劇場がウィトルウィウスの記述するギリシア型劇場の割り付け方に充分一致すると考え、S シアもその説を支持した（Bieber, M., *The History of the Greek and Roman Theater*, Princeton and New Jersey, Princeton Univ. Press, pp. 126-128, 1961, Sear, F. B., *Vitruvius and Roman Theater Design*, in *A. J. A.*, vol. 94, pp. 249-258, 1980.）。ローマ型劇場における舞台と客席の関係に関する既往研究および新たな知見については別稿で取り扱う予定である。
- 注8) Dinsmoor, W. B., *The Architecture of Ancient Greece*, New York, pp. 297-319, 1973.
- 注9) ただし、正五角形が外接する円はエウリポス周囲の貴賓席の外側が描く円弧に沿ったもので、その円が基準として選ばれた理由がはっきりしない（von Gerkan, A. and Müller-Wiener, W., *Das Theater von Ephesos*, Stuttgart, pp. 76-83, taf. 3, 1961.）。
- 注10) 例外的にオルケストラの円以外を基準の円と見なす場合が見られる。たとえばフィーヒターはエフェソスやメガロポリスの劇場ではオルケストラ周りの水路の縁の円弧、シキヨンでは背もたれ付き客席の後端部が描く円弧に従う円を基準としているが、そこに統一された基準があるわけではない（Fiechter, E. R., *op. cit.*, p. 60, abb. 27, idem., *Das Dionysos-Theater in Athens*, Stuttgart, pp. 32-33, 1950, idem., *Das Theater in Megalopolis*, Stuttgart, pp. 27-28, taf. 5, 1931.）。
- 注11) 表 1 の資料の出典を本稿ではスペースの関係から以下のような列挙形式とする。Anti, C., *Teatri greci arcaici*, Padova, 1947, Arias, P. E., *Il teatro greco fuori di Atene*, Firenze, 1934, Bulle, H., *Untersuchungen an griechischen Theatern*, in *Abh. München*, vol. 33, pp. 9-15, tav. 1, 1928, Dakaris, S., *Dodona: Archaeological Guide to Dodona*, 出版場所不詳, pp. 65-66, 1971, Dörpfeld, W. and Reisch, E., *Das griechische Theater*, Darmstadt, 1896 (reprinted in 1966), Fiechter, E. R., *Die Baugeschichtliche Entwicklung des antiken Theaters*, München, 1914, idem., *Das Theater in Oropos*, Stuttgart, 1930, idem., *Das Dionysos-Theater in Athen*, IV. Nachträge, *Das Theater im Piraeus*, Stuttgart, 1950, idem., *Das Theater von Sikyon*, Stuttgart, 1931, idem., *Das Theater in Megalopolis*, Stuttgart, 1931, idem., *Die Theater von Oiniadai und Nea-Pleuron*, Stuttgart, 1931, idem., *Das Theater in Eretria*, Stuttgart, 1937, Fougeres, G., *Fouilles de Mantinée*, in *B. C. H.*, vol. 14, pp. 248-256, pl. 17, 1890, Gebhard, E. R., *The Theater at Isthmia*, The Univ. of Chicago Press, Chicago and London, 1973, von Gerkan, A. and Müller-Wiener, W., *op. cit.*, pp. 77-83, taf. 2-4, Gogos, S., *Theater und Umgebung*, in *Klio*, vol. 68, pp. 6-31, abb. 45, 1986, Hansen, E. and Algreen-Ussing, G., *Fouilles de Delphes*, vol. 2, Atlas, Paris, tavv. 5c, 16, 19, 1975, Hoepfner, W. and Schwandner, E. L., *Haus und Stadt im klassischen Griechenland*, München, pp. 102-103, fig. 64, 68, 1986, McDonald, W. A., *The Political Meeting Places of the Greeks*, Baltimore, pp. 204-211, tav. 19, 1943, Pickard-Cambridge, A. W., *The Theater of Dionysus in Athens*, Oxford, 1946, Polacco, L., *Il teatro di Dioniso Eleutereo ad Atene*, Roma, 1990, Stillwell, R., *Corinth*, vol. 2, *The Theater*, Princeton, 1952, Requinon, Y. et Replat, J., *Le trace du théâtre de Delos*, in *B. C. H.*, vol. 51, pp. 401-422, tav. 16-20, 1927, Rossetto, P. C. and Sartorio, G. P. ed., *Teatri greci e romani*, Padova, Roma, vol. 2, 1994. エギラとコリントスの劇場の表 1 中の (L) の値は 1/200 の図面より算出し、マンティネアの劇場の表 1 中の (R) と (L) の値は 1/400 の図面より、デルフィの劇場では 1/100 の図面より算出した。

- 注12) 図面が作成された時期の測量技術から、測量時の誤差は1/200の縮尺で5%ほどが最大で想定される。同じ縮尺の図面をパソコン上で読み込んでみてもさらに誤差がでるが、測量時の誤差ほど大きくはないであろう。したがって、本稿のように半径が最大で10mほどとすると、その誤差は50cmほどとなる。ただし、デルフィの劇場の調査はそれほど古くなく、その実測図面は1/100で作成されているので(Hansen, E. and Algreen-Ussing, G., *op. cit.*, tavv. 5c, 1975)、他の4つの劇場よりも分析の精度は高く、結果の信頼性も高い。
- 注13) 既往の研究において、円形平面のオルケストラ、客席、舞台の3つが揃った劇場がいつ頃確立されたかは明らかにされていない。たとえばビーバーは劇場の明確な建築としての形態は紀元前5世紀末そして紀元前4世紀において次第に形成されたとしている(Bieber, M., *op. cit.*, p. 59.)。またローレンスやディンズムーアは上記3つの揃った劇場の出現時期について明確に指摘していない(Lawrence, A. W. *Greek Architecture*, Yale Univ. Press, New Heaven and London, pp. 205-206, 1996(5th ed.), Dinsmoor, W. B., *op. cit.*, pp. 119-120, 207-210, 246-249.)。また、イズラーは紀元前4世紀の第4四半期頃をその確立時期とみており、確立の契機となったのがリュクルゴス時代再建のアテネのディオニソス劇場であると見ている(Isler, H. P., *L'architettura teatrale antica*, in Rossetto P. C. and Sartorio, G. P. ed., *op. cit.*, vol. 1, pp. 96-98.)。
- 注14) Bieber, M., *op. cit.*, pp. 67-69, Isler, H. P., *op. cit.*, pp. 98-100.
- 注15) ギリシア語でプロスケニオン *proskenion*、ラテン語でプロスカエニウム *proscenium* と称するが、その意味は研究者によって異なる。例えばディンズムーアはオルケストラとスカエナの間にある列柱であると見(Dinsmoor, W. B., *op. cit.*, p. 394)、ロゼットはスカエナの前にある舞台であると見る(Rossetto, P. C. and Sartorio, G. P. ed., *op. cit.*, p. 568)。これに対して、ビーバーは両者を分けて定義し、プロスケニオンとはスカエナの前にある建物で、最古の事例はヘレニズム時代造の高い舞台をなすものを、後には舞台の前面を意味すると定める。一方、プロスカエニウムとは、ローマ人が用いた言葉で舞台全体を意味し、舞台の前面だけでなく舞台を形成する建築も含まれるとする(Bieber, M., *op. cit.*, p. xiii)。
- 注16) たとえばドゥルプフェルドやフォン・ゲルカンは当初プロスケニオンはスカエナとともに舞台背景をなしていたが、後にその上面部分が舞台として使われるようになったと見なす(Dörpfeld, W. and Reisch, E., *op. cit.*, pp. 379ff, von Gerkan, A., *Theater von Priene*, München, Berlin-Leipzig, pp. 73ff, 1921.)。それに対しビーバーなどは当初からプロスケニオンの上面は舞台として使用されていたと考えている(Bulle, H., *op. cit.*, pp. 234ff, Bieber, M., *op. cit.*, p. 114)。
- 注17) ポセイデイオンの劇場についてはGebhard, E. R., *op. cit.*, pp. 51-60. を、タソスの劇場についてはSalviat, F., *Le bâtiment de scène du théâtre de Thasos*, in *B.C.H.*, vol. 84, pp. 300-316, 1960 を、ロークリの劇場についてはArias, P. E., *Il teatro greco-romano di Locri Epizefiri*, in *Dioniso*, vol. 5, pp. 188-199, 1941, Mitens, K., *Teatri greci e teatri ispirati all'architettura greca in sicilia e nell'Italia meridionale c. 350-50 a.C.*, Roma, pp. 136-139, 1988 を、モルガンティナーナの劇場についてはStillwell, R., *The Theater of Morgantina*, in *Kokalos*, vol. 10-11, p. 579ff, 1964-65, *ibid.*, *Excavation at Morgantina 1966*, in *A.J.A.*, vol. 71, p. 245ff, 1967, Allen, H., *Excavation at Morgantina 1967-1969*, in *A.J.A.*, vol. 74, pp. 363ff, 1970 を参照。
- 注18) デロス島の劇場の碑文に関してはDinsmoor, W. B., *op. cit.*, p. 299, Bieber, M., *op. cit.*, pp. 110-111 に詳しい。新喜劇が紀元前4世紀末から流行することについてはビーバーによって概説されており、とりわけその代表者であるメナンドロスの活躍期がこの時期に相当することがきわめて重要な意味を持つと見なされている(*ibid.*, pp. 87-107.)。プロスケニオンの出現時期に関して、既往の研究から見ると、ディンズムーアがビーバーとともに、紀元前4世紀最後の時代に、特に紀元前315年から紀元前292年の間には仮設の木造建築として存在していたのではないかと見ている(Dinsmoor, W. B., *op. cit.*, pp. 298-299)。これに対して、紀元前300年頃にプロスケニオンの

出現年代を設定しているのがビーバーである。ビーバーの考えでは、プロスケニオンは東方の宮殿建築に起源を持ち、紀元前300年頃小アジアの劇場にもたらされ、さらに紀元前3-2世紀にかけてギリシアの劇場へもたらされた(Bieber, M., *op. cit.*, pp. 112-118.)。イスラーも、バラスケニオンが紀元前4世紀に遡る事例は見られないこと、プロスケニオンはバラスケニオンより少し後に出現したと捉え、プロスケニオンの出現時期として紀元前3世紀初め頃を想定している(Isler, H. P., *op. cit.*, p. 100.)。しかしながら、プロスケニオンの出現時期に関して既往研究はひとつのジレンマに陥っている。すなわち、現存遺構を客観的に見ても南イタリアやシチリアのギリシア植民都市の劇場のプロスケニオンは紀元前4世紀中頃まで遡る可能性があり、ギリシアでも、たとえばポセイデイオンの劇場のプロスケニオンのように紀元前4世紀末の可能性もある。しかし劇場建築のモデルとして長く見なされてきたアテネのディオニソス劇場は紀元前4世紀後期のリュクルゴス時代の再建時でもプロスケニオンの存在を確認できていない。モデルとしてのディオニソス劇場よりも古い時代にアテネ以外の地でプロスケニオンが生み出され、用いられるようになったという理由が見いだせないし、それを客観的事実として認めたい雰囲気というものも研究者の間に垣間見える。例えばポセイデイオンの第2期の劇場のプロスケニオンの建設年代が考古学的資料から紀元前4世紀末も充分にありえるが、著者は紀元前4世紀まで遡ることを躊躇し、従来の説とぶつからないように紀元前3世紀より古くはないと定めている。(Gebhard, E. R., *op. cit.*, pp. 139-141.)。

- 注19) この点はフィーヒターによってすでに指摘されている(Fiechter, E. R., *Die Baugeschichtliche Entwicklung des antiken Theaters*, München, p. 60, 1914.)
- 注20) フィーヒターはオルケストラ周りの水路外側の円弧に従った円を基準とし、その円に内接する正方形の一边がバラスケニオンに一致する(Fiechter, E. R., *Das Theater von Oiniadai und Nea-Pleuron*, Stuttgart, pp. 7-18, 1931, *idem*, *Das Dionysos-Theater in Athens*, Stuttgart, pp. 31-32, abb. 13, 1950)。しかし筆者はその円の設定の仕方に一貫性がなく筆者の客席最下段の円の設定基準に合致しないこと、また正方形の一致する場所がプロスケニオンではなく類似例のきわめて少ないバラスケニオンであることから彼の説には大きな疑問が生じる。
- 注21) Dörpfeld, W. and Reisch, E., *op. cit.*, pp. 50-52 (アテネのディオニソス劇場)、Stillwell, R., *op. cit.*, pp. 16-21, pl. III (コリントスの劇場)、Fiechter, E. R., *Das Theater im Piraieus*, Stuttgart, taf. 6, 1950 (ペイライエウスの劇場)、*idem*, *Das Theater von Oiniadae*, Stuttgart, pl. 1, 1931 (オエニアダエの劇場)。
- 注22) Dinsmoor, W. B., *op. cit.*, pp. 312-313.
- 注23) 紀元前4世紀に遡るコリントスの第1期の劇場においてスティルウェルは客席最下段の円に内接する正方形の一边がプロスケニオンの位置に一致するとしているが、この時期のプロスケニオンの位置に確証はなく、また客席最下段の位置も推定復元にすぎない。客席やプロスケニオンの位置が確定できるのはヘレニズム時代になってからである。(Stillwell, R., *op. cit.*, pp. 16-27.)
- 注24) 注(19)参照。Fiechter, E. R., *Das Theater von Oiniadai und Nea-Pleuron*, Stuttgart, pp. 7-18, 1931, *idem*, *Das Dionysos-Theater in Athens*, Stuttgart, pp. 31-32, abb. 13, 1950.

図版出典

図1: 森田慶一訳注、ウィトルーウィウス建築書(普及版)、p. 321、第18図より、東海大学出版会、1979年、図2: vonGerkan, A., and Müller-Wiener, *op. cit.*, taf. 12に筆者が加筆、図3: Dakaris, S., *Dodona*, 出版場所不詳、1971, fig. 29 (ドローナ)、McDonald, W. A., *op. cit.*, tav. 19 (メッセネ)、Hansen, E. et Algreen-Ussing, G., *op. cit.*, tav. 16 (デルフィ)、Dakaris, S., *Cassopaia and the Elean Colonies*, Athens, 1971, fig. 52, 53 (カソッパ)のそれぞれに筆者が加筆、図4: Dörpfeld, W. and Reisch, E., *op. cit.*, taf. 4に筆者が加筆。

(2006年8月14日原稿受理、2007年3月20日採用決定)